日本イギリス哲学会シンポジウムⅡ近代日本とイギリス思想―「明治150年」をめぐって

意地悪な英国、明朗な米国－福沢が見た二つの国－

静岡県立大学　平山　洋

　まずは私たちが暗黙裏のうちにに前提としている事柄が、じつは確固たる根拠をもたない、ということについて。というのは、「近代日本」がメインタイトルに、元号「明治」がサブタイトルに使われているところから見て、この二つに何やら密接な関係があると捉えられがちな常識、そのものの誤解についてである。

　近代日本という言葉からは、一般には西洋近代文明を受け入れた日本という漠然としたイメージが想起される。福沢諭吉や新島襄が明治維新（1868年）の後に日本の西洋文明化を提唱したためにそう受け取られてしまうわけだが、明治維新の英訳がMeiji Restrationであることからも分かるように、明治とは単に長州藩尊王攘夷派が王政復古の象徴として選んだ言葉にすぎなかった。つまり明治という元号と日本の近代化（西洋文明化）とは元来無関係なのである。

　福沢諭吉が目指した西洋文明国としての近代日本の祖型は、明治よりもむしろ慶應にあった。慶應（西暦1865年5月1日～1868年10月22日）という最後の和年号は、禁門の変（西暦1864年8月20日）で朝敵長州軍を撃退した禁裏御守衛総督徳川「慶」喜に「應」えるという意味を含んでいた。幕府はその時点で西洋的近代化政策を実施しつつあり、旗本福沢諭吉はその方針に従って、自ら教育機関（後の慶應義塾）を創設して人材を育成しようとしていたわけである。

　その核となるのがイギリス思想（さらにその変容態ともいうべきアメリカの思想）で、彼は三度の外遊（1860年米国サンフランシスコ、1862年欧州、1867年米国ワシントンDCとニューヨーク）の経験から、先ず何より精神において西洋人と同等の人材の必要を痛感したのであった。

　となると、その場合モデルとなるべき国は英国なのかそれとも米国なのか、という問題が生じるのは当然のことである。英国は立憲君主国であり、皇室制度をもつ日本としては将来的にそうした政治体制に移行しなければならないというのは、福沢の維新前からの宿願であった。しかし国家全体として英国が望ましいかといえば、そこでの生活を実際に経験してみると居心地のよいものではなかったのである。英国の中上流階層のもつ植民地人や庶民階層への差別意識や、実際に直面した彼らへの過酷な扱いは、福沢ら外交使節団一行を不愉快にした。慶應義塾のモデルとして直接にはロンドンのキングスカレッジ中等部を選んではみたものの、あり得べき社会のモデルとして、彼が望ましいと感じたのはむしろ米国だったのである。

　1860年春、咸臨丸でサンフランシスコに到着した福沢の見たのは、「極楽世界」とでもいうべきものだった。2年後に経験した欧州のようには階層差別が激しくはなく、肉体労働にも相応の敬意が払われている米国のあり方を、福沢は社会のモデルとしたいと考えたのである。後年二人の息子の留学先として選んだのも英国ではなく米国の東部であったし、米国の中流階層へのある種無邪気な信頼感を終生抱き続けたのでもあった。

　具体的な思想家についていうと、福沢は自らを日本のベンジャミン・フランクリンたるべく振る舞った。フランクリンは科学者であると同時に新聞社主で、さらに社交クラブ・学会・大学の創設者でもあった。『学問のすすめ』は日本版『貧しいリチャードの暦』として大々的に売れ、福沢が望んだアメリカ型日本人の育成に大きく寄与した。それと同時に英国的手堅さの一典型として、マシュー・アーノルドの批評方法論にも強い影響を受けたのだった。